

# 雑誌『婦人之友』「友の会」活動における 20世紀後半の農村生活改善 盛岡生活学校と「東北部友の会」

岩手大学教育学部 渡瀬 典子

はじめに

## 1 大正 昭和の生活改善運動

「生活改善」という言葉は1909（明治42）年6月7日付の『東京朝日新聞』の記事以降初めて日本に登場したと言われている<sup>1)</sup>。この「生活改善」が官製運動あるいは半官製のイデオロギー運動となるのは第一次大戦を経た1920（大正9）年前後で、森本厚吉らによる「文化生活研究会」の設立や当時の文部省が主導した「家事科学展覧会（1918）」「生活改善展覧会（1919 - 20）」さらには同省支援による「生活改善同盟会」の発足が象徴的である。一般に、日本における「生活改善運動」とは、生活の「合理化」「簡素化」「科学化」を志向し、「過去的生活習慣や生活様式の悪いところを改変し、新しい生活様式を生み出していくこと」とされている<sup>2)</sup>。しかし、大正期における生活改善運動は、このような思想が地方、とくに農村にまでは浸透しなかった。地方に対する政府の政策として、東北地方の場合、1913（大正2）年に起こった凶作から「東北振興会」の結成、さらには1931（昭和6）、34（昭和9）年に起こった東北地区の大凶作による飢餓や娘の身売りが大々的に新聞報道され、「東北振興」が国民的課題となり<sup>3)</sup>、その翌年には「東北更新会」が設立され、東北の各地域で生活改善のための取り組みがなされた<sup>4)</sup>。第二次大戦後、農村を対象とする生活改善運動は農林省によって開始された「生活改善普及事業」がよく知られており、具体的な取り組みについての研究蓄積も多い<sup>5)</sup>。その一方で官製ではない、民間による生活改善への組織的な取り組みとして、雑誌『婦人之友』の「友の会」活動を例とする先行研究も散見される<sup>6)</sup>。

雑誌『婦人之友』は、自由学園創設者の羽仁吉一・もと子夫妻によって、1903（明治36）年に前身の『家庭之友』として出版され、後の1908（明治41）年に『婦人之友』へ改題、現在も月刊誌として刊行されている（公称8万部、日本雑誌協会 2007.9 - 2008.8）。羽仁もと子の思想はプロテスタンティズムを背景にもち、雑誌『婦人之友』にも彼女の思想が反映され、後年誕生する読者組織である「友の会」活動にも大きな影響を与えた。

羽仁もと子は青森県八戸市出身であり、先に挙げた東北振興政策に力を注いだ首相・原敬、斎藤実は岩手県、「生活改善普及事業」に携わった今和次郎は青森県弘前市出身と東北出身者がいみじくも名を連ねる。そこで本稿は、官製の生活改善運動ではない『婦人之友』友の会活動の中で、東北地方における農村への生活改善関連活動に焦点を当てる。河西によれば、当時出版されていた『婦人公論』『主婦の友』といった女性総合雑誌では、東北凶作関係記事は極めて少ないと指摘されているが<sup>7)</sup>、『婦人之友』では、「友の会」という組織を通じて、凶作にみまわれた東北地方の6か村に「農村（東北）セトルメン

ト<sup>8)</sup>運動」を実施した。羽仁は東北地方の凶作に対し、単に物品・金銭を提供するのではなく、その地域に住む人々、とくに女性に対して生活を営むのに必要な知識や実践力をつけさせることの必要性を唱えた。この考えに賛同した『婦人之友』誌の読者や自由学園卒業生や関係者、学識経験者の支援を得て、学びの場、「農村セトルメント」が当時東北各県に1か所ずつ開設され、岩手県にも、田山村（現在は八幡平市）でセトルメントが開かれた。この田山村での活動に尽力した一人に、盛岡友の会創設に関わった吉田幾世が挙げられる。そこで、雑誌『婦人之友』を媒体とする「友の会」活動を見る際に、吉田が関わった「盛岡友の会」、「盛岡生活学校」を中心に見ていくこととする。ここで、雑誌『婦人之友』における「友の会」の特徴について以下述べたい。

## 2 雑誌『婦人之友』を軸とする「友の会」という組織体

現在刊行されている生活総合雑誌にも、雑誌の取り組みに連動する読者参加型の企画や雑誌のコンセプトに合った商品販売企画が見られるが、これらは「読者個人」 - 「雑誌」というつながりである。また、そのつながりもごく一時的なものが多い。雑誌『婦人之友』は、この「読者個人」を「読者組織」としてまとめたことに大きな特徴がある。1923（大正12）既に「友の会」は「読者組合」として複数地域に誕生し、『婦人之友』誌上でお互いの交流がはかられていた。当時の具体的な活動例として、家事整理や家計簿、料理や洋服、家族的な交際法や家庭幼稚園の提案のほか、読書会等も開催されたという。1927（昭和2）年には『羽仁もと子著作集』が刊行され、全国に記念講演会や講習会が開催された。その際、各地読者の希望により、「友の会」の名のもと一つの会として発足する運びとなった。そして、最初に開設された松本に続き、岡山、大阪、奈良、東京に「友の会」が誕生した。東北では、仙台、山形が1929（昭和4）年に友の会を創設している。1930（昭和5）年には、39友の会、約1,000人の会員で「全国友の会」が発足した。このとき、羽仁は「私たちの友の会にも多くの方が入用です。何の働きもない自分と思う人でも一人の会員として数を満たしていること、それ自身に既に大きな価値だということを深く理解したいと思います。自分たちが良いと思う人だけ少数集まっているのを堅実と思わずに、大衆の中に本気で進出する勇気が、私たちになくってはなりません。まだ、友の会のないところでは、誰か相手を見出してそこに友の会を作るようにしましょう<sup>9)</sup>」と呼びかけ、その後会員数、「友の会」数ともに1980年代まで増加を見せる。この背景には、1921（大正10）年に創立された「自由学園」の創設で、学園OGやOBが組織を支える力になったこと、あるいは野本が指摘するように、1930（昭和5）年からとった雑誌の予約・売り切り制度によって、固定的な読者層を獲得したことがあるだろう<sup>10)</sup>。さらに、「友の会」の重層的な構造も、会員確保・拡大に後押しをしたと考えられる。図1は、「友の会」の構造図だが、「最寄（会）」（「方面（会）」）各地「友の会」「部」というシステムがとられている。最寄会、通称「最寄（もより）」は、10人以下で構成された身近な数人ずつの集団を指す。ここでの「身近」とは、地理的条件のほか、就労状況等も勘案される。少人数のため、活動に対しての当事者意識が醸成しやすいこと、話しやすさや実践力が図られやすいことが大きな特徴といえる。この「最寄」の集合体が「友の会」であり、「友の会」の中には、地域ごとにまとめた「方面」を持つところもある。岩手県の場合、「釜石方面」

会がこれにあたる。「友の会」は、全国共通の実践も共有しているが、その年に何をやるかは各組織に任されている。各組織のまとまりを作り、全会員に当事者意識を芽生えさせるため、「最寄」「方面」「友の会」それぞれに「リーダー」が置かれる。この「リーダー」は、1年任期と短く、そのぶん多くの会員が「リーダー」になる可能性を持つことになる。このような、「友の会」のシステムは、羽仁もと子が提唱した「小より大へ」という思想が反映している。

全国友の会発足後、1980年代にかけて会員数は3万を超えたが、1980年代後半以降、やや減少傾向にあり、現在はおよそ22,000人である。

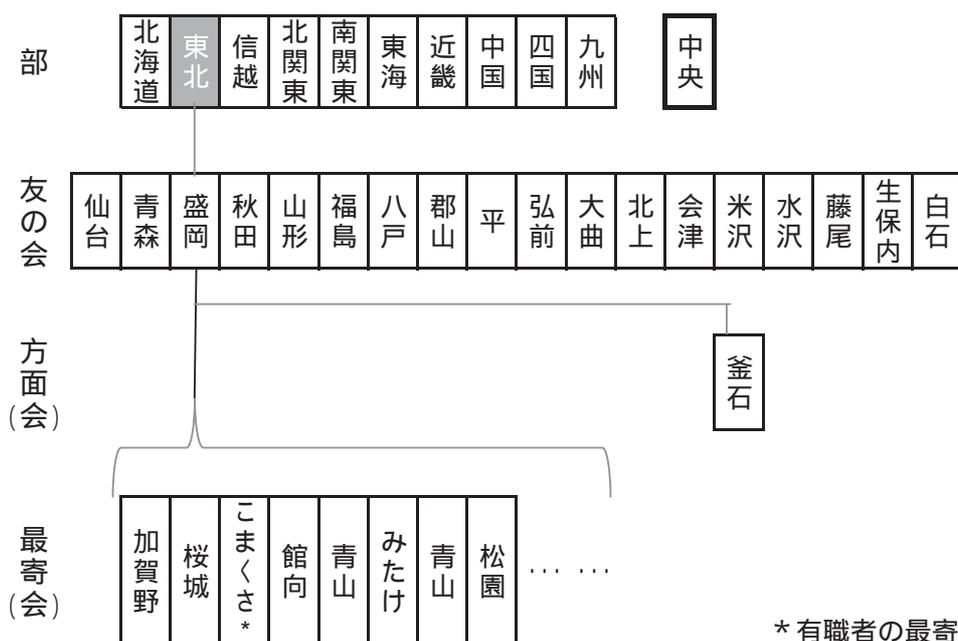


図1 「友の会」構造図（「東北部」「盛岡友の会」の場合）

### 3 「盛岡友の会」の創設と「盛岡友の会生活学校」、「盛岡生活学校」

「盛岡生活学校」を創立した吉田幾世は、岩手師範附属小学校を卒業後、東京の自由学園へ自らの意志で進学する。吉田が自由学園在学中に「友の会」が全国組織化されるが、「友の会」創設に対する当時の学友の熱気に影響を受け、盛岡にいる母親・吉田イマに複数回手紙や電報を打って、盛岡に友の会を作るように頼んでいる。当初乗り気でなかったイマではあったが、日本青年館で開催された第一回全国大会に傍聴参加したことで、盛岡友の会結成へと気持ちが傾き、盛岡に戻った後、『婦人之友』誌に掲載されていた読者名簿を頼りに、友の会結成を一人一人の購読者に呼びかけたという。そして、イマの尽力の結果、24人の会員で構成された盛岡友の会が発足する。吉田は自由学園卒業後、岩手日報勤務を経て、1933（昭和8）年に「盛岡友の会生活学校」を盛岡友の会会員とともに立ち上げる。「盛岡友の会生活学校」を作った背景には、東京友の会が実施していた「家庭生活合理化展覧会」を盛岡で実施するためと、盛岡友の会会員が、若い母親や女性に対して家庭生活に関する学習の必要性を認識し、羽仁のもと自由学園で学んだ吉田を代表へと推したためである。最初に「盛岡友の会生活学校」へ入学した13人の生徒は、羽仁の提唱し

表1 「友の会」 東北部の「農村合理化運動」「新しい農村文化運動」関連活動

年	内 容
1929 (昭和4)	仙台、山形に友の会が創設される
1930 (昭和5)	全国友の会が設立、盛岡、八戸、弘前に友の会が創設される、自由学園南沢農村セトルメント開始
1933 (昭和8)	盛岡友の会生活学校発足
1935 (昭和10)	「東北農村合理化運動」第一期はじまる
1937 (昭和12)	「一日一銭醸金」始まる
1938 (昭和13)	東北セトルメントで農繁期託児所が始まる
1939 (昭和14)	「東北農村合理化運動」第二期：農村友の会成立 (藤尾、生保内、小湊、鎌田)、「農村女子生活講習所」始まる
1948 (昭和23)	「新しい農村文化運動」全国で開催
1949 (昭和24)	自由学園の生徒協力による「農閑期衣食住学校」が始まる 「一日一銭醸金」が「農村醸金」に 「盛岡友の会生活学校」が「盛岡生活学校」と改称し、初代校長に吉田幾世就任
1951 (昭和26)	「われらの衣食住展覧会・農村版」東北各地で開催
1952 (昭和27)	「農村研究会」が始まる
1953 (昭和28)	「農閑期衣食住学校」が終わる
1954 (昭和29)	自由学園女子生徒による「農繁期託児所」 東北部、那須で始まる
1955 (昭和30)	「農村醸金」が「教育醸金」に、盛岡生活学校内に全国友の会「農村生活研究所」が置かれる
1956 (昭和31)	「明るい農村展覧会」各地で開催
1961 (昭和36)	「盛岡生活学校」の法人名を「向中野学園」と改め、校名を「向中野学園高等学校」とする。高校は「農村家庭」一学級で始まる (翌年に「生活科」に改変)
1964 (昭和39)	「教育醸金」が「われらの公共費」に

た「生活即教育」の理念のもと、30人余りの指導者（友の会会員や協力者）から衣食住、育児、経済生活に関する学習に取り組んだ。そのほか同校では、当時盛岡では珍しかった洋裁による婦人・子ども服の製作・普及、ケチャップや山ぶどうジュースの販売などの事業も行った<sup>11)</sup>。

「盛岡友の会生活学校」は開設の翌年、後述するように「農村（東北）セトルメント」事業に参画するが、「農村（東北）セトルメント」活動休止以降も、「農繁期託児所」や農繁期の「共同炊事」事業がしばらく続くこととなる。また、1949（昭和24）年には、各種学校の「盛岡生活学校」として盛岡友の会から独立をはたした。1955（昭和30）年には「盛岡生活学校」の敷地内に全国友の会から委嘱されて「農村生活研究所」が置かれた。ここでは、自ら畑で栽培した農作物を、栄養価が高く経済的な食品に加工・普及する取り組みが実践された（1990年に「生活教育研究所」に改称）。1961（昭和36）年に「盛岡生活学校」は各種学校から高等学校「向中野学園高等学校」になるが、これは当時「盛岡生活学校」を出た生徒の進路決定の際に高校卒業資格が必要になってきた状況を鑑みてのことだという<sup>12)</sup>。

## 研究の目的と方法

### 1 研究の目的

1930年代に新聞メディアや施策によって与えられた東北の農村イメージと雑誌『婦人之友』の「友の会」活動における生活改善思想との関わりに注目し、20世紀後半の東北と農村生活改善の取り組みの変遷を明らかにする。20世紀後半としたのは、1930年代の「農村生活合理化運動」、1940年代後半の「(新しい)農村文化運動」の後の状況を概観するためである。分析の視点として、本稿ではとくに盛岡生活学校の取り組みに注目する。

### 2 研究の方法

各友の会の状況を分析するため、『婦人之友』1950(44巻1号)～2000年(94巻12号)612冊、に掲載された「友の会ニュース/ページ(ジ)」、「全国友の会大会」、「全国夏期研究会」記事1918報告のうち、地域分類不能の記事、複数の友の会を扱った記事を除く1786報告を分析対象とする。「友の会ニュース/ページ(ジ)」は、時期によって掲載がなかったり、不定期掲載だったり、別の形式(郷土料理の紹介等)をとられることもあった。また、「友の会」記事は1月号に「家事家計講習会」報告、6、7月は「全国友の会大会」報告が掲載される傾向にあり、2～12月号で各地の友の会、最寄会の活動報告(講演会、愛読者会、生活講習会、幼児生活団、子ども対象の講習会等)、友の会活動の拠点となる「友の家」落成・改築報告、救援活動が誌面を占めることが多い。その中で、東北部エリアでの農村生活改善関連記事の動向、特徴的な記事を取り上げ分析する。

#### 雑誌『婦人之友』における「農村生活合理化運動」、「(新しい)農村文化運動」

先述したように、『婦人之友』の創始者である羽にもと子は八戸の出身であり、1930年代の東北地方の凶作に対して「家族日本をつくりませう」と誌上で読者に呼びかけをした。この当時の様子を吉田幾世は「羽仁先生は早くに郷里の八戸をお出になりましたから、そのころの東北の事情はあまりおくわしくはない。それで、東北部の友の会の人たちに『どうしたらいいか考えてちょうだい』という宿題が出たんです<sup>13)</sup>」と述懐していることから、具体的なアプローチの仕方は、各友の会に任されたことがここから推察される。「盛岡友の会」では、セツルメント対象地域の選定に際し、県庁へ相談に行き、「凶作が深刻で、寒さが厳しく、村長が新しい考え方を持つ人物」ということで、二戸郡・田山村をセツルメント実施の場に推薦された。その後、友の会会員との話し合いの中で「まずは村の実態を知るために調査を」ということで村へと赴いていく。ここでの実態調査は、後に「盛岡生活学校」に置かれる農村生活研究所によってまとめられた『田山村の生活』という報告書で詳らかにされている<sup>14)</sup>。表1に示すように、1935(昭和10)年に始まった「農村(東北)セツルメント」は、「東北農村生活合理化運動」の第1期として、5カ年計画のもと、盛岡友の会が田山村で着手したのと同様に、東北の各地の友の会会員、協力者によってセツルメントが開設された(青森：小湊、秋田・生保内、宮城：藤尾、山形：大蔵、福島：鎌田)。そのうち、山形の大蔵セツルメントは、風紀上の問題が生じ、短期間で事業が休

止、岩手県の田山村は当時活動の拠点とした兄畑部落の総代が戦争で召集されたこと、部落の居住者数が少なく、セツルメントに入る地域の女性（当時、彼女たちのことを生活学校、友の会会員は「小母さん」と呼んでいた）が底をついたことから、5年を待たずして、活動は廃止となった<sup>15)</sup>。5カ年計画後の第二期では、小湊、生保内、藤尾、鎌田において「農村友の会」が設立され、以降活動が存続していった（鎌田は後に「平」友の会に、小湊農村友の会は1960年代になくなる）。

次に、1948（昭和23）年～53（昭和28）年には「(新しい)農村文化運動」として、「農閑期衣食住学校」が全国で展開された。既に、生活講習会は「生活学校」を持つ「友の会」（盛岡をはじめ、岡山、長野、岐阜、大阪、名古屋、京都、神戸）で実施されていたが、全国各地の「友の会」が責任母体となり、友の会会員や東京の自由学園の生徒が指導者となって、周辺の村々に衣食住講習（洋裁、調理、洗濯、片付け方など）が行われた。この衣食住講習の内容は生活の「合理化」「簡素化」「科学化」を目指す生活改善思想に基づくプログラムともいえる。牛木は、「農村文化運動」の意義の一つを、実際の指導にあたった友の会会員の意識変革と捉えている。それはすなわち、当初彼女たちが抱いた「『低き』農村の生活現状を講習活動によって高める」という抽象イメージが、実際の農村での生活現状にふれ、「農村の生活および文化的現状に対する違和感、それゆえに運動への使命感を再確認する」という具体的プロセスを経たと見なしている<sup>16)</sup>。

### 「農村生活合理化運動」、 「農村文化運動」 以降の「友の会」活動

「農村文化運動」以降、日本は高度経済成長期を経ていく。それでは、雑誌『婦人之友』の「友の会」活動において、東北や農村に対するまなざしや活動内容に変容は見られたのだろうか。そして、変容が顕著にみられてくる時期はいつごろなのだろうか。「友の会ニュース/ページ（ジ）」、「全国友の会大会」、「全国夏期研究会」の記述をもとに、年代ごとの状況を以下見ていく。

#### 1 記事の掲載傾向

掲載された記事を11支部（海外部を含む）と中央部の12部に分類し、各年代の報告数をまとめたのが表2である。東北部は全支部中で会員数が多い地域ではないが、記事掲載割合はほぼ平均並みである。会員数が多い「南関東部」の友の会記事が多くなる傾向は否めないものの、全体として、地理的偏在がないよう掲載に一定の配慮がなされているように見える（表2）。次に、東北部の友の会活動報告の中で、特徴的な事例を紹介する。

#### 2 各年代の掲載記事の特徴

##### (1) 1950年代（18報告、総記事のうち6.7%）

1950年代前半は、「農村文化運動」只中の時期にあたるが、「農村（東北）セツルメント」として、一定の功績をあげた「生保内セツルメント」について、1950年の全国友の会では、以下の評価が掲載された。

「私どもの村では近頃万年床というものをあまり見かけなくなりました。先達ても県庁

表2 『婦人之友』の「友の会」記事掲載状況

部	1950年代	1960年代	1970年代	1980年代	1990年代	合計
東北	18	26	43	24	35	146
北海道	12	20	46	35	47	160
北関東	7	15	25	31	35	113
南関東	30	36	60	73	45	244
信越	25	22	48	33	38	166
東海	15	31	36	24	42	148
近畿	28	32	60	48	58	226
中国	6	31	50	41	47	175
四国	6	13	28	12	27	86
九州	21	17	32	27	38	135
中央	25	22	25	25	27	124
海外	3	5	9	24	22	63
合計	196	270	462	397	461	1786

注)「部」は全国友の会の区分に基づく(北関東部=茨城、栃木、埼玉、千葉、南関東部=東京、神奈川)。1918報告のうち、分類不能の記事については表中データから除いている。

の方が来られてこの村は洋服を着ている子供が多いのが目立ったといい、またちょうどおばさん達がミシンを掛けていたのを見て、こんな年をとった純農家の主婦たちがミシンを踏むなんて実に驚異だ、何かと進歩的な村だと感心して帰りました(1950年7月)」また、翌年の全国大会では「盛岡生活学校」が農村向けの「衣食住展覧会」の状況として、「農村向きの展覧会があるというのを聞き伝えて折悪しく苗代作りの忙しい時期にぶつかったものにもかかわらず、盛岡の近村はもちろん、遠く二時間近くも汽車で来るような村々からも2,300人と団体を作って繰りこんできました(1951年6月)」との報告が見られた。また、「農村文化運動」期間中の全国友の会大会報告では、各地で開催された「農閑期衣食住学校」について報告会がもたれた。「農村文化運動」以降も継続して実施された「農繁期託児所」は、50年代半ば以降複数の報告が見られる。1954年の報告を見ると、東北では盛岡、生保内、藤尾、信州では松本、岸野、上田の友の会が主体となって周辺地域で行われた。例えば「盛岡友の会」による松尾村での実践は、実際に10日間各家庭に入って、農村の食生活を記録すると同時に食生活改善に取り組んだ。また、1955年の1月号では、「盛岡友の会」は「盛岡生活学校」と共同して、岩手山麓の山深い地域である寺田村の若い女性のために、衣食11カ月講習を開催し、長岡村では「冬季生活学校」を開くなど、農閑期の県下の農村を回ったことが報告された。また、「盛岡生活学校」が1955(昭和30)年に「全国友の会農村生活研究所」を委嘱され、全国規模の農村生活研究会がもたれることになった。農村生活研究所は当時信越部の友の会への農村セツルメント、農繁期託児、生活講習等に対する示唆を与えたことが報告よりうかがえる。そのほか、「盛岡生活学校」へ北海道の上士幌から留学生一名が送られたという報告(1957年7月)、農村生活研究所製作による「明るい農村生活展覧会」が東北信越など21か所で開催されたという報告、農繁期託児所が、青森、岩手、秋田、長野などで開かれることになり、学園

女子学部生徒たち45人が各所に赴いたことが報告として掲載された。「農村セツルメント」活動地であった岩手県田山村を訪れた自由学園の生徒は、

「子どもの数は予定よりずっと増えて90人。100人を越えた日もあった。私たち8人のほかに、食のため盛岡生活学校から一人、友の会や村の婦人会から毎日三人ずつ協力してくださった。(中略)「どうしたの」と聞けば、言葉の通じなさにいよいよ声を大きくして泣く、昼食のころになってどうやら落ち着きはしたものの、まだ泣く子は絶えなかった。(中略)自分の名前も、部落もわからない、家では兄とかおんじとか呼ばれ、自分の名前を呼ばれることがないためであろう(1957年8月)」

と、当時の農繁期託児の様子を描写している。

このように、50年代は「東北農村合理化運動」後の報告や、「農村文化運動」における衣食住講習会の様子、農繁期託児の報告など、東北の農村生活改善に関する報告が多く見られた。しかし、藤尾友の会の報告を見ると、地域住民が「1日10円の託児料が支払えず友の会の教育醸金から拠出した」という記載や、生活時間調べをしたところ「都会の時間と比べあまりに違う」結果が出たという1958年の東北部会報告など、負のイメージが見え隠れする。

#### (2) 1960年代 (26報告、8.4%)

1965年5月の報告にも、北海道から盛岡の農村研究所に留学した生徒の事例報告や、農繁期託児所(生保内友の会主催)の報告記事が見られた。また、同年12月の記事を見ると、向中野学園高等学校となった旧盛岡生活学校が、授業の一環として、東京、大阪から送られてくる物資を盛岡友の会会員とともに分別・リフォームし、「友愛セール」の商品準備をする状況も報告されている。「友愛セール」とは、友の会会員が所持する不用品を必要な人に活かしてもらうことから端を発し、現在は会員の手作り品も販売されるもので、収益は公共費にあてられる。

ところが、60年代半ばには農業従事者の友の会活動参加の困難さ(1966年7月号)、生保内友の会の経済面での運営難が指摘されたが(1967年7月号)、生保内友の会はその後も長期にわたって農繁期託児を継続実施することとなる。

友の会では、会費の中に「醸金」の費目が経常されてきた。これは「家庭は簡素に社会は豊富に」という羽仁の提唱によって、当時一日一銭醸金を持って東北農村セツルメントを開いた名残である。60年代は「われらの公共費」という費目名に変えられ、経費を必要とする友の会の援助に用いられた。66年は、全国友の会農村生活研究所に100万円支出された。

#### (3) 1970年代 (43報告、9.2%)

1970年代になると、友の会活動開始時やセツルメント活動を振り返る懐古的な記事が掲載されるようになる。例えば、「友の会ができたころには主婦が外出する、集会をもつ、会を組織するという事は容易ではなかった」(盛岡友の会、1971)、「30年前は文化的なことがすべてセツルメントが中心で村中が友の会を注目していた(生保内友の会、1972)」がその例である。「全国友の会農村生活研究所」を委嘱されていた向中野学園高等学校理事長 吉田幾世は、友の会中央委員も務め、昭和30年以降、岩手県下117か所で生活講習会や農繁期託児所を通して農村合理化を実践してきたことを1975(昭和50)年の同研究会

で報告している。70年代には、盛岡友の会生活学校一期生で、向中野学園高等学校において被服を担当した佐々木綾によるリフォーム講習が盛岡以外の友の会や全国大会で紹介された。また、70年代においても生保内の幼児生活団の取り組みが言及された。

#### (4) 1980年代 (35報告、8.6%)

1980年に全国友の会が50周年を迎え、「農村セトルメント」のエピソードを振り返る企画記事が掲載された。リアルタイムに進行する農村生活改善記事は、主に全国農村生活研究会報告に関するものが中心で、1981年5月の報告は生活時間のマネジメントや栄養改善といった生活改善のみならず、農業経営に関する内容も中心課題とされた。向中野学園高等学校に委嘱された全国友の会農村生活研究所も88年には廃止されたが、全国農村生活研究会は80年代以降も継続開催された。農村友の会として始まった藤尾友の会は、日中母親の多くが就労する地域のため、「こども文庫」の取り組みや子どもの生活指導を実施したとの報告が掲載されている(1985年9月)。そのほか、80年代の記事を見ると、「有職者グループ」の活動報告(たとえば青森友の会、1981)が増える傾向が見られた。また、会員の中にも「遠隔会員」や「通信会員」の割合が増えてきたことが指摘された。また、生活改善思想の中にあつた「合理化」が、「家庭のために無駄を廃す」という考え方が中心だったのに対して、このころから「地球環境のため」という視点も報告の中に言及されるようになる。

#### (5) 1990年代 (35報告、7.5%)

1990年代では、農村に関する記事は全国農村生活研究会報告のみとなる。93年に開催された同研究会は、盛岡、水戸、松本、飯田、四日市の各地で行われた。90年代は、80年代以上に農業経営に関する内容が多くなり、「農村生活合理化運動」当時に見られたような農村生活改善の雰囲気は感じられない。また、友の会活動は主に女性限定の、女性向けの内容が中心だったが、この時期には男性を意識した活動内容(例えば、講演「父さんの子育て絵日記」：会津友の会、1995年)や、秋田友の会の「生活展」に訪れた男性のコメント紹介(「なんでも妻にしてもらっていた。これからは自分もします」1991年)が象徴的である。

#### ・まとめ

国民の生活意識の近代化、均質化を目指した官製の生活改善運動のほかに、本稿では雑誌メディアと「友の会」組織という複合的な構造をもつ『婦人之友』誌の取り組みを概観した。くしくも政府や新聞によって1930年代の東北大凶作時に喧伝され形成された東北地方、とくに北東北地方の「最貧地意識・劣化感覚」<sup>17)</sup>が、『婦人之友』誌での「農村(東北)セトルメント」が始まる背景にある。とはいえ、多くの関係者(とくに友の会会員だった女性)が職業とは無関係の、ボランティアな立場で困難を極める諸活動に従事したことは特筆すべきことである。これは、個人レベルでの農村生活改善が必要だという使命感、実行力はもちろんのこと、「友の会」という組織体の特徴(少人数グループ「最寄」の集合体である「友の会」というシステム、短い任期のリーダー制度)が相俟つてのこと

と推察される。

雑誌『婦人之友』の50年間にわたる「友の会ニュース/ページ(ジ)」、「全国友の会大会」、「全国夏期研究会」記事を見ると、1950年代から60年代半ば頃までは「東北農村生活合理化運動」、「農村文化運動」の名残が記事に現在進行中の事象として登場する。しかし、1970年代以降は回顧的なトーンで農村生活改善が語られるようになっていく。また、高度経済成長期以降を経た同時期には、各地の友の会において、「農村」「都市」の課題・取り組みの差異があまり見られなくなった。盛岡生活学校に置かれた「全国友の会農村生活研究所」を拠点とする諸活動も、80年代以降は農村生活改善の視点だけでは語られなくなっていく。そのかわりに、かつての農村生活改善の論調は、『婦人之友』の事業としてアジア地域に展開した海外での諸活動の中で垣間見ることができる。これは、生活改善普及事業のノウハウが、アジア・アフリカ地域の開発事業の中で生かされていることとも通底する。

パットナムが指摘するように、様々な社会関係資本に関わる組織の会員数は減少の一途にある<sup>18)</sup>。一般に年齢構成に決まりのない組織の場合、年々会員の平均年齢が上昇し、新たに若年の会員が入ってこないという傾向が見られるが、「友の会」では、全会員数は減少傾向にあるものの、会員の年齢構成に著しい変化は見られず(例えば、「盛岡友の会」では20代から90代の会員で構成)、親、子、孫といった多世代会員の存在も推察される。20世紀を経て、日本の生活様式は「生活の合理化」を「生活(家事)の外部化」と捉え、変貌を遂げてきた。しかし、雑誌『婦人之友』友の会は、「生活の外部化」をあまり志向しない生活様式(例えば、衣食住における手仕事の重視、徹底的に時間や支出の無駄を廃する取り組み)をその特徴としてきた。今後、同会の活動の中で、先述した生活様式への志向の動向に注目し、別の機会に考察したい。

なお本研究は科学研究費(若手研究(B)課題番号19700560)の助成を受けたものである。

(注及び引用文献)

- 1) 吉田佐柄子. 1999. 「生活改善」日本生活学会編『生活学事典』TBSブリタニカ、p. 539
- 2) 前掲1)
- 3) 河西によれば、東北地方の凶作が大々的に取り上げられた背景には政治抗争、軍事予算拡大へのせめぎ合い等があったという(河西英通. 2007. 続・東北 - 異境と現境との間. 中公新書、p.97)
- 4) 野本は、当時の東北更新会秋田支部の状況について言及している(野本京子.2007.東北農村生活合理化運動の展開: 農村セツルメントの軌跡. 東京外国語大学論集No.75. pp.171-191)
- 5) 例えば、天野寛子. 2001. 戦後日本の女性農業者の地位 男女平等の生活文化の創造へ. ドメス出版、市田(岩田)知子. 2003. 日本の生活改善普及事業にみる農村女性の組織化 生活改善から農村女性政策へ. 農業史研究. No.36など
- 6) 前掲4)のほか、野本京子. 2005. 東北農村生活合理化運動前史: 戦前期『婦人之友』友の会の実践、東京外国語大学論集No.71、pp.127-143、牛木純江. 2006. 戦後

初期の生活改善・生活合理化運動 - 雑誌『婦人之友』友の会による「農村文化運動」 - .  
東京歴史科学研究会第41回大会個別報告、pp.30 - 44

- 7) 前掲 3)、p.82。前掲 4) においてもこの点について言及がある。
- 8) 『婦人之友』誌、関連文献・論文によって“セツルメント”、“セトルメント”等、表記が様々だが、原文に即して記述する。本文中で著者が論じる際には“セツルメント”と表記する。
- 9) 羽仁もと子1930『婦人之友』、婦人之友社
- 10) 前掲 6) 野本、p.127
- 11) 吉田幾世. 1973. 生徒に語った...私たちの学校の歴史.向中野学園、p.29
- 12) 向中野学園高等学校は、1998年に盛岡スコーレ高等学校に改称されるが、創立当時と同じく「生活即教育」を教育理念に挙げている。
- 13) 吉田幾世. 1995. I B C 岩手放送編.対談集岩手の昭和史.山口北洲印刷、p.244-256
- 14) 衣食住環境（衣服の所持数、栄養摂取状況、万年床の割合等）、経済計画の状況をはじめ、各戸において細かく実態調査を実施した（盛岡友の会『田山村の生活』）。
- 15) 吉田幾世. 1994. 東北セツトルメント物語.学校法人向中野学園高等学校生活教育研究所、pp.98-109
- 16) 前掲 6) 牛木、p.38
- 17) 前掲 3)、p.214
- 18) ロバート. D. パットナム. 2006. 孤独なボウリング. 柏書房